

The Effects of Praise-seeking Need and
Rejection-avoidance Need on Friendship
Formation and Maintenance in LINE

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小島, 弥生 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/469

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



LINEでの友人関係の形成および維持への意思に 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が及ぼす影響

The Effects of Praise-seeking Need and Rejection-avoidance Need on Friendship Formation and Maintenance in LINE

小 島 弥 生

KOJIMA, Yayoi

メッセージ型のスマートフォン用アプリケーションであるLINEは2011年のサービス開始以降、日本国内では10～20代の年齢層を中心に急速に利用者数を増加させている（総務省, 2015）。本研究では大学生を対象にLINEでのコミュニケーションにおける承認欲求（賞賛獲得欲求・拒否回避欲求）の影響力を検討した。新たに友人関係を築こうとする際に相手とLINEのアカウントを交換するタイミングや、関係を解消したいと考えている相手からLINEのメッセージが送られてきた場合の対処について、賞賛獲得欲求や拒否回避欲求の高低によって考え方が異なるかを検討した。拒否回避欲求の強い人は、新たな友人関係形成の際に出会った直後にアカウントを交換する意思をもつ傾向にあり、関係を解消したい相手からのメッセージには応答する傾向にあることが示された。これらの結果は拒否回避欲求の強い人は表面的な友人関係を選好しやすいという先行研究（齊藤・藤井, 2009）と一致していた。

本研究では、近年10代～20代の若者に急速に浸透しているコミュニケーション手段としてのLINEを取りあげる。そして、新たに友人関係を形成する際や、既存の友人関係を解消したい場合におけるLINEでのコミュニケーションに、若者の承認欲求（賞賛獲得欲求・拒否回避欲求）がどのような影響を及ぼすかについて検討する。

LINEの特徴

LINEとは、2011年6月にNHN Japan株式会社（2013年4月にLINE株式会社へと商号

変更）がサービス提供を開始した、スマートフォン用のコミュニケーション・アプリケーションである。LINE株式会社のホームページ（<http://line.me/ja/>）によれば、LINEは「1対1トークはもちろん、グループトークも可能」な無料のメールサービスであり、特定の相手との1対1でのメッセージ（テキストの他、スタンプと呼ばれる一種のイラストレーションや、写真、動画、音声等もメッセージとして送受信が可能）のやり取りだけではなく、複数人でグループを作り、グループ内でメッセージを共有することを可能としている。三

キーワード：LINE、友人関係、表面的関係、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求

Key words : LINE, friendship, superficial friendship, praise-seeking Need, rejection-avoidance Need

島・本庄（2015）によると、LINEは青少年の間に広く普及しているが、第三者への公開は許されていないメッセンジャ型のアプリケーションである。メッセージは、対象となっている個人あるいはグループ内でのみ共有され、その他の人々がメッセージを見聞きすることはできない。この点はメッセージが（公開の程度は利用者がある程度設定できるものの）第三者への公開を原則としているソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、SNS）とは大きく異なる点である。そして、スマートフォンを主要な媒体としているが、パソコンやフィーチャーフォン（いわゆるガラケー）でも、一部利用ができないサービスもあるが、利用が可能な点も特徴といえる。

また、LINEには無料電話のサービスもあり、Skypeと同様に通話アプリケーションとしても浸透している。そしてゲームアプリケーションとしての要素もある。さらに、LINEは厳密な意味ではSNSではないものの、SNSの要素をもつサービスも提供している。例えば、LINEの利用開始時に利用者の個人認証用に作成する「アカウント」の中に「LINE ID」と呼ばれる利用者を認識するキーを設定することができ、このLINE IDを用いれば、自分の携帯電話番号等を相手に知られずにLINE IDのみを交換することで互いを「友だち」として登録することも可能になる。さらに、アーティストや有名人、さまざまなブランドがLINE上に提供する「公式アカウント」を「友だち登録」することで、そのアカウントが提供するメッセージやサービスを利用できる。

総務省の情報通信白書では、平成26年版にLINEについての言及がみられ、平成27年版（2014年の調査データ）においてLINEが調査

対象として初めて加わったことが確認できる。以下に最新の情報通信白書である平成28年版にまとめられた結果を示す。

まず、LINEの主要な利用媒体であるスマートフォンの利用率は日本人調査対象者全体（1000人）の60.2%であり、比較対象であるアメリカ・イギリス・ドイツ・韓国・中国が80～90%台の利用率であることに比べると低い。ただし、日本でもLINEの中心的な利用層である20代に限ればスマートフォン利用率は87.0%となり、国際的な利用率と変わらない。そして、LINEの利用率は日本では相対的に高く、全世代の44.9%、20代に限れば73.0%にのぼる。一方、比較対象の5か国では、韓国のLINE利用率が20.2%（20代は19.7%）である以外は、いずれも1割未満となっている¹⁾。

また、前年の平成27年版情報白書によれば、身近な友人や知人との対面での会話を除いたコミュニケーション手段として、20代では「LINE等のメッセージアプリでのテキストのやりとり」と答えた者が52.0%と最多であり、さらに、日常的なコミュニケーション手段としてだけでなく身近な友人や知人へ「重要な事柄を報告する場合」でも、20代に限ってはLINE等でのやりとりと答えた者が34.1%と最多であった²⁾。これらの調査結果から、LINEは日本人の20代の若者たちにとって、友人・知人とのコミュニケーション手段として“互いに使えることが前提の手段”となっていることがうかがえる。

若者の友人関係と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求

青年期の友人関係の類型について、青年心理学の分野では「内面的関係」と「表面的関係」という2側面（e.g. 岡田, 1999）で語ら

れることが多い。内面的関係とは、伝統的な青年観に基づく青年期の友人関係の類型である。青年期において人は自分自身についての関心（内省）が高まると共に、人格的な共鳴や同一視をもたらす深い友人関係をもつことにより、新たな自己概念を獲得、健康な成熟が促進されるというのが、伝統的な青年観である。この青年観では、青年が同年代の友人との間に互いの内面を開示しあう関係性があることが前提となっている。一方、表面的関係とは、そのような内面的関係とは異なる、近年になって若者によくみられるようになった友人関係の類型である。友人との内面的な関わりを避け、表面的な楽しさを追求し、互いに深入りして傷つけあう可能性を懸念して表面的な付き合いに終始するという友人関係を指す。

齊藤・藤井（2009）は、青年の「内面的関係」と「表面的関係」は必ずしもある個人の中に背反するものではなく両立する可能性を指摘し、内面的関係と表面的関係を捉えるための友人関係尺度を作成した。そして、尺度で類型化した「両面群」「内面群」「表面群」「関係回避群」の群間で、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の強さがどのように異なるかを検討している。

賞賛獲得欲求とは自己の肯定的な側面を他者に認めてもらいたい、認めてもらうための行動をしたいとする承認欲求の強さであり、拒否回避欲求とは自己の否定的な側面を他者に知られたくない、嫌われないように行動したいとする承認欲求の強さである（e.g. 小島・太田・菅原, 2003；菅原, 1986）。

齊藤・藤井（2009）では、友人関係の類型のうち「表面群」および「両面群」での拒否回避欲求得点が高いこと、対して「内面群」

と「関係回避群」では拒否回避欲求得点が低いことから、「表面的関係」と拒否回避欲求との間の関連を指摘している。つまり、嫌われないという欲求の強さは、友人との内面的な深いつながりよりも表面的な関係の維持に焦点を向けやすい可能性が示されている。

LINEでの友人関係の形成・継続と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求

以上の社会的状況と先行研究の知見を基に、本研究では若者の賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の強さが、LINEの利用における彼らの友人関係への考え方にどのような影響を及ぼしているかを探索的に検討する。

第一に、新しく知り合い、これから友人関係が始まることが予見される相手に対し、LINEのアカウントをいつ、どのようなタイミングで交換しようと思うかが、賞賛獲得欲求や拒否回避欲求に影響されるかを確認する。賞賛獲得欲求は、自己呈示において自らの優れた点やユニークな点を他者に示す傾向に影響を及ぼす（小島他, 2003；菅原, 1986）。一方、拒否回避欲求は前述のように表面的な友人関係の維持と関連がある（齊藤・藤井, 2009）。したがって、賞賛獲得欲求の強さは、知り合った相手が自分の優れた点やユニークな点を認めてくれそうだという確認が抱けたタイミングで、より相手と交流するためにアカウントを交換することを促すことが予測される。そして、拒否回避欲求の強さは表面的に相手とつながるためにアカウントを交換することを促すことが予測される。

第二に、LINEでメッセージのやりとりを行う間柄であった相手との友人関係を維持する意思をなくした場合に、その相手からのメッセージに対してどのような対処を志向す

るかについて、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が及ぼす影響力について確認する。賞賛獲得欲求の強さは、自分が交流する必要のなくなった相手との関係を維持するコストを重くみて、そのような相手からのメッセージに応じなくなることが予測される。一方、拒否回避欲求の強さは、表面的な友人関係では傷つけ合いを恐れるという先行研究の知見(齊藤・藤井, 2009)に基づくと、たとえ交流する意思をなくした相手であっても、その相手からのメッセージに応じ続けることが予測される。

方法

調査対象者・調査時期

2016年4月に東京都内の私立大学で心理学の授業を受講している435人を対象に、授業の一部として調査への参加協力を依頼した。口頭および書面で倫理的な配慮を傳達し、同意を得た学生のみにも回答を求めた。

質問紙の内容

質問紙は「大学生のインターネット・SNS利用に関する調査」というタイトルで、7つのパートから構成されていた。うち、本報告の分析に用いた内容は以下の3点である。

(1) デモグラフィック情報（パート1）

性別（男性・女性からあてはまる方に○をつけて回答することを求めた）、年齢（現在の年齢を記入するよう求めた）、学年（回答時の学年を記入するよう求めた）の3変数について尋ねた。

(2) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（パート2）

小島・太田・菅原（2003）の作成した賞賛獲得欲求9項目と拒否回避欲求9項目の計18項目に対し、「5.あてはまる」から「1.あては

まらない」の5件法で回答するよう求めた。

(3) LINEの利用に関する設問群（パート5）

以下の8つの事柄について回答を求めた。

(a) LINEを始めた時期：利用を始めた年齢を記入するよう求めた。

(b) LINEを使い始めたきっかけ：4つの選択肢から該当する1つを選択するよう求めた。選択肢は「友人から招待されたので使い始めた」、「スマートフォンを買った時にアプリが入っていたので使ってみた」、「家族が使っていて、自分も使うようになった」、「その他（カッコ内に該当事項を自由に記述する）」の4つであった。

(c) LINEの提供するサービスの利用頻度・利用率：LINEの各種サービスの利用頻度について、「1.使わない」「2.月に1,2回使う」「3.週に1,2回使う」「4.週に3,4日使う」「5.毎日使う」の中から該当する1つを選択するよう求めた。また、LINEの利用量全体を100%としたときに各種サービスを利用する割合について%で示すとおよそ何%になるかについて数字を記入するよう求めた

(d) LINEでリンクしている人数：リンクとは互いにアカウントないしはLINE IDを認識して連絡が取れることを指す。ここでは、リンク人数の総数の他に、①現実生活でも付き合いのある人数と、②LINE上での知り合いである人数を、それぞれ記入するよう求めた。

(e) LINEの必要性について：他者とコミュニケーションをとる手段として、時間つぶしをする手段としてなど、いくつかの手段としてのLINEの必要性について、「1.不要である」から「4.必要である」の4件法で回答するよう求めた。

(f) 関係が始まりそうな相手とのLINEの

アカウント交換のタイミングについて：「あなたは、これから付き合いが始まりそうな人と出会った際に、どの時点でLINEのアカウントをお互いに交換してもいいと思っていますか。」という質問文の後に、以下の5つの選択肢から該当する1つを選択するよう求めた。選択肢は「まずは交換してから交流を始める」「知り合った日の別れ際に交換する」「何度かその人と会って交流をしてから交換する」「交換する理由（例、連絡事項がある）ができた時に、はじめて交換する」「その他（カッコ内に該当事項を自由に記述する）」の5つであった。

(g) 関係をやめたい相手からのメッセージへの反応について：「あなたは、LINEのアカウントを知っている相手であっても、その人と交流したくないと思った場合に、どのような対応をする方ですか。」という質問文の後に、①現実生活での知り合いの場合、②LINE上でのみの知り合いの場合の2ケースのそれぞれについて、以下の5つの選択肢から該当する1つを選択するよう求めた。選択肢は「放置して（特に何もしないで）、相手からのメッセージを無視する」「自分からは連絡はしないが、相手からのメッセージ等には応答する」「非表示設定にして、相手のメッセージ等を見ない」「相手のアカウントをブロックして、連絡を取れないようにする」「その他（カッコ内に該当事項を自由に記述する）」の5つであった。

(h) LINEでのやりとりに対する感情および行動傾向：以下の4つのケースでの感情や行動の傾向について回答を求めた。

「不安になる」と「不安にならない」を両端に示し、「1.とても」「2.やや」「3.どちらともいえない」「4.やや」「5.とても」の5件法から該当する1つに○をつけるよう求めた。

ケース2：自分が送ったメッセージに対し、いつまでも既読がつかない場合の苛立ち

「苛立ちを感じる」と「苛立ちを感じない」を両端に示し、「1.とても」「2.やや」「3.どちらともいえない」「4.やや」「5.とても」の5件法から該当する1つに○をつけるよう求めた。

ケース3：今は別のことがしたいのに、トークのメッセージが届いたとき

「相手を待たせると悪いので即座に応答する」と「今したいことをするために放置する」を両端に示し、「1.そうする」「2.ややそうする」「3.どちらともいえない」「4.ややそうする」「5.そうする」の5件法から該当する1つに○をつけるよう求めた。

ケース4：会話したくない相手からトークのメッセージが届いたとき

「自分が会話したくないので放置する」と「とりあえず何らかの応答をする」を両端に示し、「1.そうする」「2.ややそうする」「3.どちらともいえない」「4.ややそうする」「5.そうする」の5件法から該当する1つに○をつけるよう求めた。

この他に、日常的なインターネットの利用状況、SNSの利用状況や利用の特徴等を尋ねる質問群・尺度から質問紙は構成されていたが、詳細は割愛する。

結果

分析対象者のLINE利用の特徴

調査参加者のうち日本語が母語でない者、

一定の値を連続して回答していた者、回答に著しい欠損があった者を除くと413人（男性220人、女性193人、平均年齢 18.8 ± 1.04 歳）が有効回答者となった。このうち409人（99.1%）がLINEを利用していった。そこで以下の分析はこの409人を分析対象者とした。

分析対象者がLINEの利用を開始した平均年齢は15.57歳であり、高校入学をきっかけにLINEの利用を始めた者が多いことが示された。回答時の年齢からLINEの利用開始年齢を引いて求めたLINEの利用期間の平均値は3.21年となった（Table 1）。LINEの利用のきっかけについての回答をまとめると「友人から招待されたので使い始めた」が258人（63.1%）と最多になり、次いで「スマートフォンを買った時にアプリが入っていたので使ってみた」が83人（20.3%）であった。「家族が使っていて、自分も使うようになった」は27人（6.6%）に過ぎず、「その他」が39人（9.5%）となった。なお、回答欠損が2人いた。「その他」の回答内容を概観すると「流行しているから」「みんなが使っているから使わないと不便に感じたから」「メールよりもLINEの方が友だちとの連絡に便利だと思ったから」といった回答が多く、「友人から招待されたので使い始めた」という回答選択肢と

ともに、LINEの利用開始には友人関係におけるコミュニケーションに用いるためという理由が大きな要素であることが示された。

Table 2に回答者がLINEでリンクしている人数に関する調査結果を示した。LINE上でのみの知り合いがいると回答した者が278人（68.0%）にのぼり、現実生活での対面する友人とのコミュニケーションの他にLINEのみでコミュニケーションをとる友人・知人がいるとする回答者が多数派となった。LINEが提供しているサービス各種の利用頻度と主観的な利用率の平均値をTable 3にまとめた。本来がメッセージ型アプリケーションとしてサービスが始まったLINEに相応し、「トークでのメッセージのやりとり」を「毎日使う」と回答した者が375人（91.7%）と圧倒的多数派となり、主観的な利用率の平均値も69%（SD=17.35%）と高かった。一方で、SNSの要素が強い「公式アカウントのサービス利用」や「タイムライン」の利用頻度は「使わない」との回答が半数前後となり、若者のLINE利用は友人間でのメッセージのやりとりに特化していることが示された³⁾。この傾向はLINEの必要性に関する質問への回答でも示され、「特定の友人との付き合いのための手段」や「特定の集団（部活動、サークル、等）内での連

Table 1 分析対象者のLINE利用開始に関する特徴

	N	平均	(SD)	中央値	最小値	最大値
回答時の年齢	409	18.78	(0.812)	19	18	23
LINE開始年齢	407	15.57	(1.040)	15	13	20
LINEの利用期間 ^a	407	3.21	(0.925)	3	0	6

a 「回答時の年齢 - LINE開始年齢」で算出した

Table 2 LINEでリンクしている人数

	N	平均	(SD)	中央値	最小値	最大値
LINEのリンク人数	408	193.50	(112.180)	200	3	588
①現実生活でも付き合いがある人数	407	135.51	(99.802)	110	3	520
②LINE上でのみの付き合いの人数 ^a	278	67.26	(77.670)	40	1	502

a 「0人」という回答および無回答は除外して算出した

Table 3 LINEの各種サービスの利用頻度・主観的な利用割合

利用頻度	A ^a メッセージ		B ^a ノート・アルバム の利用		C ^a 画像・動画・音声		D 通話		E ^a 公式アカウント の利用		F ^a タイムライン		G ^a ゲーム		H その他	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
使わない	1	(0.2)	80	(19.6)	38	(9.3)	52	(12.7)	203	(49.6)	244	(59.7)	328	(80.2)	0	
月に1、2日	3	(0.7)	155	(37.9)	79	(19.3)	167	(40.8)	113	(27.6)	79	(19.3)	26	(6.4)	0	
週に1、2日	10	(2.4)	94	(23.0)	89	(21.8)	110	(26.9)	41	(10.0)	42	(10.3)	21	(5.1)	2	(0.5)
週に3、4日	20	(4.9)	44	(10.8)	118	(28.9)	56	(13.7)	20	(4.9)	22	(5.4)	17	(4.2)	0	
毎日	375	(91.7)	36	(8.8)	85	(20.8)	24	(5.9)	32	(7.8)	22	(5.4)	17	(4.2)	0	
主観的な利用率 (LINEの利用量全体を100%とした場合の各サービスの利用割合の主観)																
	平均 (SD)		平均 (SD)		平均 (SD)		平均 (SD)		平均 (SD)		平均 (SD)		平均 (SD)		平均 (SD)	
	68.99 (17.353)		6.04 (7.722)		11.23 (11.685)		9.12 (9.450)		2.99 (7.633)		2.11 (5.208)		2.12 (8.308)			

a 項目A、B、C、D、E、Fの正式な内容は以下のとおり。
A：トークでのメッセージのやりとり、B：ノート・アルバムを含めたトークでのやりとり、C：トークでの画像・動画・音声のやりとり、E：公式アカウントのサービス利用、F：タイムライン（発信や閲覧）

Table 4 LINEの必要性

	N	平均	(SD)	中央値	最小値	最大値
特定の友人との付き合うための手段	409	3.90	(0.395)	4	1	4
特定の集団（部活動、サークル、等）内での連絡手段	409	3.90	(0.346)	4	1	4
家族間での連絡手段	409	3.41	(1.002)	4	1	4
友人や知り合いを増やしていく手段として	409	2.88	(1.013)	3	1	4
趣味など特定の話題について共有できる知り合いを作る手段	409	2.37	(1.052)	2	1	4
1人で時間つぶしをする手段	409	2.15	(1.117)	2	1	4

Table 5 分析対象者の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の基礎統計量

	N	平均	(SD)	中央値	最小値	最大値
賞賛獲得欲求	409	27.77	(6.956)	28	9	45
拒否回避欲求	409	31.96	(6.996)	33	12	45

絡手段」としての必要性は高く評定し（それぞれ4件法で3.90という平均値を示し、天井効果が表れている）、一方で「1人で時間つぶしをする手段」（平均2.15）、「趣味など特定の話題について共有できる知り合いを作る手段」（平均2.37）としての必要性の評定は低かった（Table 4）。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の影響

分析対象者の賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の特徴をTable 5にまとめた。筆者のこれまでの研究で得られたサンプルと比較すると、拒否回避欲求の平均値（31.96）と中央値（33.00点）の間に1点以上の違いがみられたことが特徴的であった。2つの欲求の間には

$r = .21$ ($p < .01$) という弱い正の相関がみられ、この相関係数の値はこれまでの研究データと大きな違いはない結果であった。

次に、LINEでリンクしている人数と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との相関を調べた。その結果、Table 6に示したように賞賛獲得欲求が強いほどLINEでリンクしている人数が多いという弱い正の相関関係がみられたが、拒否回避欲求の強さとLINEでリンクしている人数との間の有意な相関はみられなかった。

なお、LINEでリンクしている人数と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との相関を調べたところ、Table 6に示したように賞賛獲得欲求が強いほどLINEでリンクしている人数が多いという弱い正の相関関係がみられたが、拒

Table 6 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求とLINEでリンクしている人数との相関

	拒否回避欲求	LINEのリンク人数	①現実生活	②LINE上
賞賛獲得欲求	.211**	.299**	.189*	.183*
拒否回避欲求		.066	.021	.050
LINEのリンク人数			.749**	.478**
①現実生活でも付き合いがある人数				-.019
②LINE上のみでの付き合いの人数 ^a				-

n=409, aの変数との相関に限りn=278 *p<.05 **p<.01

Table 7 新たな友人関係開始時のアカウント交換についての考え方

	度数	(%)
1. まずは交換してから交流を始める	62	(16.2)
2. 知り合った日の別れ際に交換する	226	(55.3)
3. 何度かその人と会って交流してから交換する	51	(12.5)
4. 交換する理由ができた時に、はじめて交換する	68	(16.6)
5. 現在の友達リストに入っている人以外は増やさない (ので、交換しない)	1	(0.2)

注) 無回答が1人いた

Table 8 アカウント交換のタイミングと賞賛獲得欲求（高・低）、拒否回避欲求（高・低）とのクロス表

		アカウント交換のタイミング				計
		1 即日：最初に 交換	2 即日：別れ際 に交換	3 何度か交流後 に交換	4 理由があれば 交換	
拒否低	賞賛低	11 (11.5)	43 (44.8)	18 (18.8)	24 (25.0)	96
	賞賛高	9 (12.5)	45 (62.5)	6 (8.3)	12 (12.7)	72
	(拒否低；小計)	20 (11.9)	88 (52.4)	24 (14.3)	36 (21.4)	168
拒否高	賞賛低	20 (20.4)	57 (58.2)	10 (10.2)	11 (11.2)	98
	賞賛高	22 (15.6)	81 (57.4)	17 (12.1)	21 (14.9)	141
	(拒否高；小計)	42 (17.6)	138 (57.7)	27 (11.3)	32 (13.4)	239
計		62	226	51	68	407

注) カッコ内は各行の計を100%とした割合

否回避欲求の強さとLINEでリンクしている人数との間の有意な相関はみられなかった。

1) 新たな友人関係形成時のアカウント交換

既存の「友だち」の人数と賞賛獲得欲求との間に正の相関関係がみられたが、では、LINEでの新たな友人関係の形成に賞賛獲得欲求と拒否回避欲求はどのような影響を及ぼしているだろうか。

友人関係が始まりそうな相手とLINEのアカウントを交換するタイミングに関する考え方への回答をTable 7に示した。半数以上が「2.知り合った日の別れ際に交換する」を選択していた。「1.まず交換してから交流する」を含め、知り合ったその日のうちにアカウントを交換するという考え方を示した回答者が全体の7割超となった。「5.現在の友だちリストに入っている人以外は増やさない（ので、

交換しない)」を選択した回答者は1人しかおらず、現代の日本人大学生にとってLINEが知り合った人との連絡手段として一般的である傾向が示唆された。

賞賛獲得欲求と拒否回避欲求のそれぞれを平均値で高低2群に分け、各群でのアカウント交換のタイミングに関する考え方に何らかの特徴があるかを調べるために、クロス集計表 (Table 8) を作成し、考え方を従属変数、賞賛獲得欲求 (高・低) と拒否回避欲求 (高・低) を独立変数とする、多項ロジスティック回帰分析を実施した。なお、多項ロジスティック回帰はSPSS ver.22を用いて実施した。

分析の結果、「1.まず交換してから交流する」と「4.交換する理由ができた時に、はじめて交換する」の2カテゴリーの選択において拒否回避欲求の有意な効果 (Wald値=5.58 ($p < .05$)、オッズ比 = .42、オッズ比の95%信頼区間.20~.86) がみられた。クロス集計表の回答パターンから、拒否回避欲求高群では「1.まず交換してから交流する」を、拒否回避欲求低群では「4.交換する理由ができた時に、はじめて交換する」を選択する比率が期待値よりも高いことが示された⁴⁾。

つまり、拒否回避欲求が強い人は、初めて知り合った、これから友人になろうとする相手との間でLINEのアカウントを交換するこ

とを真っ先に行うという考えを持ちやすいという結果であった。

2) 関係を継続したくない相手からのメッセージへの対処

次に、関係をやめたい相手からのメッセージに対する反応についての回答結果をTable 9に示した。(A) 現実生活での知り合いの場合では、「2.自分から発信しないが相手のメッセージには応答する (以下、応答)」が343人 (83.9%) と多数を占めた。(B) では実際にLINE上のみでのつながりが1人以上いる者 (278人) に限って分析したところ「応答」は89人 (32.0%) となった。

(A) において「3.非表示設定にして相手のメッセージ等を見ない」と「4.相手のアカウントをブロックする」の2カテゴリーへの回答者数が5%未満と小数であったこと、この2カテゴリーはその内容が相手とのやりとりを自分から拒絶するという共通性があることから、以下の多項ロジスティック回帰分析ではこの2カテゴリーの反応を「拒絶」というカテゴリーに再カテゴリー化して分析に用いることとした。なお、「1.相手からのメッセージを無視する」は以下の分析では「無視」と表現する。

従属変数をメッセージへの反応 (無視・応答・拒絶の3カテゴリー)、独立変数を賞賛獲

Table 9 関係継続意思のない相手からのメッセージへの対処についての考え方

	(A) 現実生活での知り合い		(B) LINE上のみでの知り合い	
	度数	(%)	度数	(%)
1. 放置して、相手からのメッセージを無視する	38	(9.3)	75	(18.3)
2. 自分からは連絡はしないが、相手からのメッセージ等には応答する	343	(83.9)	89	(21.8)
3. 非表示設定にして、相手のメッセージ等を見ない	15	(3.7)	30	(7.3)
4. 相手のアカウントをブロックして、連絡を取れないようにする	10	(2.4)	81	(19.8)
5. その他	2	(0.5)	0	(0.0)
(B) のみ：LINE上のみでの接触相手はいない	—	—	131	(32.0)

注) 無回答が (A) で1人、(B) で3人いた

得欲求（高・低）と拒否回避欲求（高・低）とする多項ロジスティック回帰分析の結果、(A)の現実生活での知り合いの場合に限って、「応答」と「拒絶」の2カテゴリの選択において拒否回避欲求の有意な効果（Wald値 = 4.99 ($p < .05$)、オッズ比 = .38、オッズ比の95%信頼区間.17~.89）がみられた。クロス集計表（Table 10）の回答パターンから、拒否回避欲求高群では「応答」を、拒否回避欲求低群では「拒絶」を選択する比率が期待値よりも高いことが示された。

つまり、拒否回避欲求が強い人は、LINE上のみでの付き合いの相手であればともかく、現実生活でも知り合いの相手である場合には、相手との関係を断ち切ることがしがたく、自分からはメッセージを発信しないまでも相手からのメッセージには応答を続けるという消極的な友人関係を維持し続ける傾向があるという結果であった。

考 察

若者の賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の強さ

が、LINEを利用した友人関係の形成や維持に関する意思にどのような影響を及ぼしているかを検討することが本研究の目的であった。具体的には、これから友人関係が始まることが予見される新しい知り合いに対する、LINEのアカウントの交換のタイミングに関する考え方と、友人関係を維持する意思を失った相手からLINEのメッセージが送られてきた場合の対処に、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求がどのような影響を及ぼすかについて検討した。

得られた結果を総合すると、LINEを利用した友人関係の形成や維持に影響を及ぼしている承認欲求は、賞賛獲得欲求ではなく拒否回避欲求であるといえる。

拒否回避欲求とは、相手から自分に対する否定的な評価が示されることを避け、嫌われないように自己呈示をしようという動機づけとつながる承認欲求である。先行研究（齊藤・藤井, 2009）に示されているように、拒否回避欲求の強さは友人関係の種類のうち、表面的な関係の維持との関連が指摘されている。

Table 10 関係をやめたい相手への対応と賞賛獲得欲求（高・低）、拒否回避欲求（高・低）とのクロス表

	(A) 現実生活での知り合いの場合				(B) LINE上のみでの知り合いの場合				
	対応の仕方			計	対応の仕方			計	
	1 無視	2 応答	3・4 拒絶		1 無視	2 応答	3・4 拒絶		
拒否低	賞賛低	9 (9.6)	80 (85.1)	5 (5.3)	94	16 (29.6)	17 (31.5)	21 (38.9)	54
	賞賛高	7 (9.6)	56 (76.7)	10 (13.7)	73	13 (25.0)	15 (28.8)	24 (46.2)	52
	(拒否低； 小計)	16 (9.6)	136 (81.4)	15 (9.0)	167	29 (27.4)	32 (30.2)	45 (42.5)	106
拒否高	賞賛低	7 (7.1)	88 (89.8)	3 (3.1)	98	17 (26.2)	19 (29.2)	29 (44.6)	65
	賞賛高	15 (10.6)	119 (84.4)	7 (5.0)	141	29 (27.9)	38 (36.5)	37 (35.6)	104
	(拒否高； 小計)	22 (9.2)	207 (86.6)	10 (4.2)	239	46 (27.2)	57 (33.7)	66 (39.1)	169
計	38	343	25	406	75	89	111	275	

注) カッコ内は各行の計を100%とした割合

したがって、新たな友人関係形成時のLINEのアカウント交換のタイミングについての考え方としては、まず「表面的に知り合う」ために連絡手段を確保することを促す力が拒否回避欲求にあることが考えられる。ただし、拒否回避欲求が新たに友人関係を形成する機会が生じた際の「表面的に知り合う」ことを促す理由としては、いくつかの可能性が想定される。第一に、相手に嫌われることを未然に防ぐために積極的にアカウント交換を行っている可能性である。自分が友人関係を築く意思のあることを相手に進んで示すことで、相手から嫌われないようにしようという過程が想定される。第二に、相手から嫌われないようにするために、友人関係になろうとする相手の意向を暗黙のうちに読みとり、受動的にアカウントを交換している可能性である。どちらの可能性が妥当であるかは本研究の知見からは明確にできず、今後検討する必要がある。

一方、関係を継続する意思のない相手からのLINEのメッセージへの対処についても、拒否回避欲求の強さが影響を及ぼしていることが示された。この点も齊藤・藤井（2009）の研究知見である、拒否回避欲求の強さが表面的な友人関係の維持と関連しているという知見から説明ができよう。一度友人関係を形成した相手に対し、たとえ付き合いの継続意思が弱くなったとしても、拒否回避欲求の強い者にとっては明確に相手を拒絶したり無視したりすることが相手からの自分に対する否定的評価につながる可能性を予見させ、行動選択肢とならないことが考えられる。

最後に、賞賛獲得欲求については有意な効果が示されなかった点について触れる。本研究の結果では、LINEでの対人関係の開始や

終わらせ方についての意思と賞賛獲得欲求との関連はみいだせなかった。ただし、賞賛獲得欲求の強さはLINEでリンクしている人数と有意な正の相関を示しており、このことは、自分のことを肯定的に評価する他者を増やすために積極的に他者と関わろうとする姿勢の表れととらえることができる。したがって、LINEでのコミュニケーションの形態に関しては、拒否回避欲求よりも賞賛獲得欲求の方が影響を及ぼしている可能性も想定され、これも今後の検討課題といえる。

注

- 1) これはLINE以外のメッセージ型アプリケーションないしはチャット型アプリケーションが他国では浸透しているためでもある。例えばアメリカ発のWhatsAppはアメリカ・イギリス・ドイツでの利用率が2～6.5割と相対的に高い。韓国ではKakaotalkの利用率が75.6%と高く、中国では微信（WeChat）の利用率が88.2%にのぼる。
- 2) その他のコミュニケーション手段の回答率は、「電子メール」が23.5%、「無料通話アプリ（LINE、Skype等）を含めた電話」が13.5%、「SNS（FacebookやTwitter等）でのテキストのやりとり」が8.6%であった。また「重要な事柄を報告する場合」については、「電子メール」30.1%、「電話」21.5%、「SNS」9.7%であった。
- 3) 回答者のほぼ全員がスマートフォンを使いLINEを利用している。よって、利用媒体の問題でSNSの要素の強いサービスが使えていないわけではない。
- 4) ただし、拒否回避欲求を平均値（32点）で高低に分割せず、中央値（33点）で高低に分割した場合には、多項ロジスティック回帰分析における拒否回避欲求の効果は有意傾向になった（Wald値 = 3.64 ($p = .056$)、オッズ比 = .42.95%信頼区間.25～1.02)。したがって、拒否回避欲求の効果は強くない可能性も示された。

引用文献

- 小島弥生・太田恵子・菅原健介（2003）. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み. 性格心理学研究, 11, 86-98.
- 三島浩路・本庄勝（2015）. 技術的観点からのネットいじめ対策. 通信ソサイエティマガジン（電子通信情報学会）, 34, 102-109.
- 岡田努（1999）. 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について. 教育心理学研究, 47, 437-439.
- 齊藤茉莉絵・藤井恭子（2009）. 「内面的関係」と「表面的関係」の2側面による現代青年の友人関係の類型的特点－賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および充実感からの検討－. 愛知教育大学研究報告（教育科学編）, 58, 133-139.
- 総務省（2014）平成26年版情報通信白書. <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/pdf/26honpen.pdf>（2016年9月5日取得）
- 総務省（2015）平成27年版情報通信白書. <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/27honpen.pdf>（2016年9月5日取得）
- 総務省（2016）平成28年版情報通信白書. <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/pdf/28honpen.pdf>（2016年9月5日取得）
- 菅原健介（1986）賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求－公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について. 心理学研究, 57, 134-140.

付記

本研究の結果の一部は、日本社会心理学会第57回大会（2016年9月17～18日；関西学院大学）にて発表した。